

ブラウンバッグ運動から みえてきた かかりつけ薬剤師業務

一般社団法人土浦薬剤師会*, ポリ薬局グループ 金澤 幸江
東京理科大学薬学部**

KEY WORDS

- ブラウンバッグ運動
- かかりつけ薬剤師
- 医薬品適正使用
- ポリファーマシー
- 服薬コンサルティング

Family pharmacist work seen
from Brown Bag movement.

Yukie Kanazawa
(会長*, 臨床教授**)

はじめに

2016年に厚生労働省から発表された『患者のための薬局ビジョン～「門前」から「かかりつけ」、そして「地域へ」～¹⁾には、これからの薬剤師・薬局のあり方として、「健康サポート機能」, 「服薬情報の一元的・継続的把握」, 「医療機関などとの連携」も示された。このなかに‘薬剤師による総合的な服薬管理’を行う方法の1つに、「ブラウンバッグ運動」が紹介された。筆者自身も、地域における薬局薬剤師として、この「ブラウンバッグ運動」を実践することで、服用薬のエンドユーザーである一般市民が、OTC(over the counter)・サプリメントも含めた薬物間相互作用・有効性や安全性・服用アドヒアランスなど、どのような問題をどれだけ抱えているのか、またその問題に対し、薬局薬剤師がどのように関与すれば解決できるのかを考える機会となった。

この経験も踏まえて、今回あらためて「ブラウンバッグ運動」についてまとめてみたい。

I. ブラウンバッグ運動とは

ブラウンバッグ運動とは、患者が日常的に服用している医療用医薬品、OTC、サプリメントなどすべてを薬局薬剤師が確認し副作用や相互作用の危険性などを点検することで、潜在的な問題を早期発見・早期対策につなげるチェックプログラムである²⁾。服用薬などに関する市民の理解を深めるとともに、その適正使用を推進する活動である。1980年代の米国で始まり、茶色の紙袋に薬を入れて薬局にもってくるように働きかけたことから「ブラウンバッグ運動」と名付けられた。英国でも、医療用医薬品、OTC、サプリメントの相談はMedicines Use Reviewと呼ばれ、薬局薬剤師の業務として確立され